

[編集後記]

吉崎亮造

国立大学法人がスタートしてから1年を経過した。じっと耳を澄ましてみよう。何が変わり、何が変わらなかったのか。旅費の費目制限が緩やかになり、出張が楽になったかもしれない。会議の多さや、回ってくる文書のうるささに大きな変化はないかもしれない。しかしもう一度じっと耳を澄ましてみよう。一法人となった国立大学は、独自の経営が出来るようになったという。しかし1年を経過し、いわゆる改革派の学長が再選されず、安定志向の学長に変わったところも多いという。変革が終わったのか。変革を好まなかったのか。国立大学法人の予算に占める人件費は全国平均値で56%を超えているという。人件費を50%以下に押さえようとするなら、10%以上の人員合理化が必要となる。耳を澄ましてしばらくするといろんな足音が遠くから響いてくる。明るい足音もある。大きな総合研究棟が4つも新築された。外部資金の獲得

も着実に増えている。国際化も進んでいる、地域との連携も進んでいる。

東京はそこに居るだけでいろいろな情報が入り大きな刺激を受ける。これまでの筑波はそうではない。静寂の中に新しい発想を求め構想を練ることが出来た。しかし自ら新しい情報を求める努力をしないと夜郎自大に陥る危険性もはらんでいた。秋葉原が大きな変貌を遂げている。「滄桑(そうそう)の変」とも言える変貌である。つくばエクスプレスという大動脈を通して新しい情報と刺激が流れてくる。筑波の地にももう一度新たな命が生まれ、大きく育つことを期待しよう。その「何か」を求める若い力とひたむきな心を育てる筑波大学には堅実さがある。創設以来30年を経た筑波大学は、これからの30年が楽しみな大学である。(よしざき りょうぞう)